

ひょうご伝説紀行
妖怪と自然の世界

千草の老人
長生きな大男の伝説

伝説

千草の老人
長生きな大男の伝説

紀行

長寿伝説
・宍粟千種
・『峰相記』
・八百比丘尼伝説

関連情報

用語解説
参考書籍
所在地リスト

伝説

千草の老人 長生きな大男の伝説

奈良時代が終わろうとしていた延暦（えんりゃく）2（783）年。今の宍粟市千種町（しそうしちくさちょう）のあたりが、宍粟郡千草村（しそうぐんちくさむら）と呼ばれていたころのことです。

千草の大山（おおやま）という人里はなれた山の中に、そまつな小屋をかけて、体のとても大きな老人が住んでいました。その老人がいつからそこに住んでいるのか、千草の人々の中にも知るものはだれもいません。ただ、この老人は大変な長生きであるといううわさばかりが流れていました。

この年三月、そのうわさを聞いた宍粟郡の長官である春日部羽振（かすかべのはぶり）が、この老人を役所へ呼び出しました。

「おまえは、なぜあのような山奥に一人で住んでいるのだ。」

長官は問いました。そのころはふつうの人であれば、郡の長官に呼び出されれば庭に平伏（へいふく）してふるえながら答えるものでしたが、老人はどっかりとこしをおろし、大きな背中をピンとのばして、役所の外まで聞こえるような大きな声で答えました。

「わしは十三歳の時に天狗（てんぐ）にさらわれ、そのあと今住んでいる山に捨てられたのじゃ。わしを捨てるとき、天狗は自分に仕えてくれた礼だと言って、ひとつの団扇（うちわ）をくれた。この団扇を持っていれば、長生きができるというのじゃよ。」

「ではおまえはその団扇を持っているから長生きなのじゃな。」

長官がそう問いかけると、老人は天を見上げて大笑いをしながら答えました。

「いやいや、それがのう、そのあとしばらくしてから、天狗はまた団扇を持って帰ってしまったのじゃよ。惜しくなったのかのう。じゃが、わしはこうして長生きをしておる。不思議なものじゃわい。ハッハッハッ。」

老人は楽しそうに笑いました。長官をはじめ、その場にいるものたちはさっぱりわけがわかりませんでした。

伝説

千草の老人 長生きな大男の伝説

老人は、千草に住んでいた山伏（やまぶし）の次男で、さらわれたときの名前を小春（こはる）といったと伝えられています。

老人は、三百八十歳のとき、ついにそれまで住んでいた大山を降り、同じ千草の千町ヶ原（せんちょうがはら）に出て、毎日いろいろなお経を読んで暮らしました。老人は日ごろ食べるものは松の葉ばかりでしたが、水は毎日三十六リットルも飲んでいたと言います。そして大変な大男で、背丈は二メートル二十センチメートル以上、片手には三メートル六十センチメートルもある長い鉄の棒を持ち、背中には柄（え）の長さが二メートル七十センチメートルもある大きなまさかりを背負って歩いていたそうです。

それから二百年以上がたった正暦（しょうりゃく）3（992）年、今の佐用町（さようちょう）にあった宇野山（うのやま）というところに、鬼神（きじん）があらわれて暴れまわっているとの知らせが届きました。国中の神々に対して、鬼神が退散（たいさん）するように祈りがささげられ、姫路（ひめじ）や龍野（たつの）あたりに領地を持っていた播磨国（はりまのくに）の役人たちが、軍勢をひきいて討伐（とうばつ）に向かいました。

やがて、暴れまわっていたものたちは無事に退治されましたが、その正体は鬼神ではなく、鬼の面をつけたならずもの一味でした。その首領の不動麻呂（ふどうまる）という人物は、この千草の老人の子孫だったと伝えられています。不動麻呂一味を退治した国の役人たちは、主だった五人の首を取り、二度とこういうものたちがあらわれないようにと、かつて老人が住んでいた宍粟の千草ヶ原の林の中にさらしたということです。

（『播州府中記』、『播州巡行聞書』をもとに作成）

紀行 長寿伝説

宍粟千種

老人が住んでいたという播磨（はりま）の西北端、宍粟市千種町（しろうしちくさちょう）を訪ねてみた。現在は「千種」と表記するが、江戸時代までは「千草」と書かれることが普通であった。「千草」の名称は、すでに奈良時代初めに書かれた『播磨国風土記（はりまのくにふどき）』に「千草村」として登場する。明治初めまでは、山の土を水路に流して取る砂鉄を原料とし、周辺の豊富な森林資源を燃料とする「たたら製鉄」が盛んだった地域でもある。

伝説では、老人は「大山」に住んでいたとされ、その後に「千町ヶ原」に出たとされている。残念ながら「大山」も「千町ヶ原」も、現在のどこにあたるのかははっきりしない。宍粟市一宮町（しろうしいちのみやちょう）にも千町というところがあるが、一宮町と千種町とはかなり離れていてしっくりこない。『播州巡行（考）聞書（ばんしゅうじゅんこうききがき）』という江戸時代の書物には「千草の千町原」で猿に化かされたという話がある。やはり「千町原」は、現在の千種町にあったと考えた方がよさそうだ。千種町岩野辺（いわのべ）には千草仙人の墓とされる石塔があるという。

千種の山は深い。北側の鳥取県境には三室高原（みむろこうげん）、西側の岡山県境にはちくさ高原が広がる。いずれもゆるやかな斜面に広大な森林がひろがっている。山岳修験の霊場ともなっていた岡山県境の後山（うしろやま）、鳥取県境の三室山、宍粟市波賀町（しろうしはがちょう）との境界付近の植松山（うえまつやま）など、標高1000mを超える山並みが東北西の三方を取り囲んでいる。どれも奥深く、「大山」や「千町ヶ原」と呼ばれてもおかしくない高山や高原である。こうした深い山の世界への畏れが、この老人伝説を生み出したのである。



千種の山
(岩野辺より笛石山方面を望む)



岩野辺二宮神社



後山(岡山県美作市側から)



三室高原



ちくさ高原
(天兒屋川源流付近)



植松山



志引峠から見た千種の谷

『峰相記』

このサイトで紹介した伝説の前半は、江戸時代中ごろに編纂された『播陽万宝知恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』に収録されている『播州府中記（ばんしゅうふちゅうき）』の記述をもとに、多少想像をふくらませて構成したものである。ただし残念ながら、単に長生きで背の高い老人がいたという程度の話で終わってしまっており、すでに話そのものの詳細が失われかけているように見える。

また、後半の宇野山の山賊の話は、同じく『播陽万宝知恵袋』に収録された『播州巡行聞書』から採録している。『播州府中記』の話は老人が主役となっているが、『播州巡行聞書』の方は山賊伝説を主題とするものである。こうした別の主題の話の中に、千草の老人の名前が登場するということから見て、やはり江戸時代以前の古い段階においては、千草の老人の伝説は相当有名であったと考えられる。

実際、この伝説は中世から語られていたようだ。現在、太子町（たいしちょう）の斑鳩寺（いかるがでら）に写本が伝わる『峰相記（みねあいき）』。これは、南北朝時代に執筆された、播磨の宗教・歴史・地理を伝える書物であるが、千草の老人の伝説も「千町原ノ老翁（ろうおう）」という題名だけが記述の中にあげられている。残念ながら話の内容はわからないが、この伝説は、少なくとも南北朝時代から語りつがれていたことがわかるのである。

ただし、この話は『峰相記』の筆者によって、「証拠モ時代モナク、大様（おおよう）ナル伝説共ニテ」とされている。すでに中世の知識人にとっても、信じるに足りない話とされていたようだ。

『峰相記』が生み出された姫路市石倉（いしくら）の鶏足寺（けいそくじ）跡を訪ねてみた。峰相山（みねあいさん）と呼ばれる山の山頂近くに伽藍（がらん）があった山岳寺院で、戦国時代の終わり、羽柴秀吉（はしばひでよし）の焼き討ちにあって滅亡したとされている。

寺跡へは、南麓の石倉地区から尾根筋をたどって、途中亀岩（かめいわ）や大黒岩（だいこくいわ）といった巨岩を通過しながら、山頂へ向かうコースがある。山頂付近には、下から見上げているだけでは想像がつかないほど、かなり広い平坦地がひろがっていて、いくつもの人工的に削平された平坦面が段状に積み重なっている。そのうち最も高い一帯にある平坦面には、二つの祠（ほこら）と、いくつかの寄せ集められた五輪塔（ごりんとう）がまつられている。いまは訪れる人もまれな山中だが、かつては、多数の堂舎や僧房が立ち並んでいたようだ。こうした山上の寺院で、『峰相記』は執筆された。



卯の山峠
(宇野山峠、佐用町末広)



峰相山鶏足寺跡



峰相山遠景
(大黒岩手前より)



亀岩遠景



大黒岩



五輪塔群



石段跡？

八百比丘尼伝説

『峰相記』には、このほかにも今日では消滅しかかっている伝説がいくつも記載されている。そうした話としても一つだけ、明石の人魚の話にふれておきたい。これも『峰相記』では「明石浦二人魚ヲツリタル事」と話の名前があげられるだけのものである。また、『播陽万宝知恵袋』に収録されている『播州古所伝聞志（ばんしゅうこしょでんぶんし）』では、「明石の浦で人魚を釣ったのは、神護景雲元（767）年7月10日のことで、小枝の連という人が釣った」と記されている。これも断片的な記述と言わざるを得ない。しかし、この話については、全国的に流布している八百比丘尼（はっぴやくびくに）伝説との関連が指摘されている。



人魚(錦絵 観音靈験記
三十二番 近江国観音寺)



人魚(『北斎漫画』)

八百比丘尼伝説とは、人魚の肉を食べた女性が不老長寿の効果を得るという話で、多くの場合、いつまで経っても顔かたちも若いまままで、人並みはずれた長寿のために周囲から畏れられ、自ら若狭（わかさ＝現在の福井県西部）の寺へ行って尼僧として余生を送るという筋書きになっている。県域でも神河町比延（かみかわちょうひえ）で伝えられていたことが知られている。『峰相記』の断片的な記述から、こうした伝説が中世から語られていた可能性が考えられるのである。

不老長寿は、古くから多くの人々の願いであったはずである。しかし、千草の老人にせよ、八百比丘尼にせよ、現在残されている伝説や史料ではむしろそれを不気味なものとしてとらえている印象を受ける。猫や猿といった動物も、年をとりすぎると化け猫やヒビといった妖怪に変化していくと考えられていたが、これと同じように思われたのだろうか。あるいは、誰もが欲しいものを手に入れた者へのねたみや、普通ではない者、日常性、常識からはずれた者への、恐れや排除の感情などをうかがうこともできよう。

しかし、そうしたマイナスイメージだけがこうした伝説の本来の主旨だったのだろうか。ここで紹介した2つの話は、遅くとも中世から語られている伝説であった。時代の変化にともなって伝説が変わっていく中で、何か大事な要素が語られなくなってしまったのかもしれない。



明石の海



明石港

用語解説

【『播磨国風土記』】はりまのくにふどき

律令国家（りつりょうこっか）の命令によって編纂された古代播磨の地理書。霊亀元（715）年前後に編纂されたものと見られている。現存するものは、三条西家（さんじょうにしけ）に所蔵されていた古写本で、巻首の赤石（明石＝あかし）郡の全部、賀古（加古＝かこ）郡冒頭の一部と、巻末の赤穂郡（あこうぐん）の全部の記載が欠落している。活字化されたものは、日本古典文学大系新装版『風土記』（秋本吉郎校注、岩波書店、1993年）のほか、全文を読み下した、東洋文庫145『風土記』（吉野裕訳、平凡社、1969年）などがある。

【『播州巡行（考）聞書』】ばんしゅうじゅんこうききがき

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻43収録。芦屋道海（あしやどうかい）著。播磨諸所の古跡、寺社や武家、僧侶たちをめぐる奇談や逸話を集めた書物。芦屋道海は天正年間に著作活動を進めた人物であり、本書もそのころの成立と考えられる。道海については、本用語解説『播磨府中めぐり（はりまふちゅうめぐり）』項目を参照されたい。

【『播陽万宝知恵袋』】ばんようばんぼうちえぶくろ

天川友親（あまかわともちか）が編纂した、播磨国の歴史・地理に関する書籍を集成した書物。宝暦10（1760）年に一旦完成したが、その後も若干の収録書籍の追加が行われている。天川友親は現在の姫路市御国野町御着（ひめじしみくにのちょうごちゃく）の商家に生まれた。収録された書物は、戦国末・安土桃山時代から、友親の同時代にまでわたる125件に及ぶ。これらのほとんどは、現在原本が失われてしまっており、本書の価値は高い。活字化されたものは、八木哲浩校訂『播陽万宝知恵袋』上・下（臨川書店、1988年）がある。

【『播州府中記』】ばんしゅうふちゅうき

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻14収録。天正4（1576）年芦屋道仙（あしやどうせん）の著。播磨の伝説集で、もと79項目の話が収められていたが、『播陽万宝智恵袋』には、三木通識が他書に出ているものを省いて、19項目を抽出したものが収められている。芦屋道仙は、『播陽万宝智恵袋』巻43収録の赤松了益（あかまつりょうえき）著『播州龍城聞書（ばんしゅうりゅうじょうききがき）』に、飾東郡三宅（しきとうぐんみやけ＝現在の姫路市三宅）に住む占い師であり、平安時代の伝説的陰陽師芦屋道満（あしやどうまん）の子孫である、と記されているので、実在の人物と見てよいだろう。なお、三木通識については、本用語解説の『播州府中めぐり拾遺（ばんしゅうふちゅうめぐりしゅうい）』項目を参照されたい。

【『峰相記』】みねあいき

峰相山鶏足寺（みねあいさんけいそくじ＝現在の姫路市石倉の峰相山山頂付近にあった寺）の僧侶が著した中世播磨の宗教・地理・歴史を記した書物。原本は本文冒頭の記述から貞和4（1348）年ごろに成立したと考えられる。現存する最善本は揖保郡太子町（いぼぐんたいしちょう）の斑鳩寺（いかるがでら）に伝わる写本で、奥書から永正8（1511）年2月7日に書写山別院（しょしゃざんべついでん）の定願寺（じょうがんじ）で写されたものであることがわかる。活字化されたものは、『兵庫県史』史料編中世4（兵庫県史編集専門委員会、1989年）や、全文口語訳をした、西川卓男『口語訳『峰相記』 中世の播磨を読む』（播磨学研究所、2002年）などがある。

用語解説

【羽柴秀吉】はしばひでよし

1537 - 1598。織田信長に仕えて頭角を現し、天正5（1577）年に信長の命を受けて播磨に進出する。この時点ですでに播磨の多くの勢力は信長に服属していたが、小寺孝高（こでらよしたか、後の黒田如水）の協力などによってあらためて平定を進めた。しかし、天正6（1578）年に三木の別所（べっしょ）氏、摂津有岡城（ありおかじょう=現在の伊丹市）の荒木村重（あらかむらしげ）が相次いで離反したため、三木城などをめぐって戦った。天正8（1580）年に、別所氏のほか、英賀（あが=現在の姫路市飾磨区英賀宮町付近）の一向一揆勢力、宍粟郡（しそぐん）の宇野（うの）氏などを攻略して播磨を平定した。また同時期に但馬へも兵を進めていて、最終的には播磨と同じ天正8年に、守護家山名氏を降伏させて平定した。天正9（1581）年には因幡国鳥取城や淡路国を攻略するとともに、居城としていた姫路城を改築している。

天正10（1582）年の本能寺の変の後、明智光秀（あけちみつひで）、柴田勝家（しばたかついえ）らを相次いで滅ぼし、小牧・長久手の戦い（1584年）の2年後に徳川家康（とくがわいえやす）を臣従させ、天正13（1585）年に四国を平定する。翌14年には豊臣姓を名乗り関白となり、15年に九州を平定、天正18（1590）年に関東、東北を平定し全国を統一した。文禄元（1592）年からは2度にわたる朝鮮半島への侵略戦争を進めたが、慶長3（1598）年に没した。

【『播州古所伝聞志』】ばんしゅうこしよでんぶんし

『播陽万宝智恵袋（ばんようばんぼうちえぶくろ）』巻14収録。天正2（1574）年芦屋道考（あしやどうこう）の著。播磨の社寺、歴史、風俗などを記したもの。本来は82項目の話が載せられた書物であったが、『播陽万宝智恵袋』には、三木通識が他書との重複を省いて抽出した39項目が載せられている。著者の芦屋道考については詳しいことはわからない。三木通識については、本用語解説の『播州府中めぐり拾遺（ばんしゅうふちゅうめぐりしゅうい）』項目を参照されたい。

参考書籍

伝説の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
播州府中記(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播州巡行(考)聞書(収録:『播陽万宝知恵袋』下)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播州龍城聞書(収録:『播陽万宝知恵袋』下)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
日本伝説 播磨の巻	1918 (1978復刻)	編著:藤沢衛彦	日本伝説叢書刊行会

歴史・文化の参考書籍

書籍名	刊行年	著者名	発行者
峰相記(収録:『兵庫県史』史料編中世4)	1989	編集:兵庫県史編集専門委員会	兵庫県
増補播陽里翁説(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播州古所伝聞志(収録:『播陽万宝知恵袋』上)	1988	編纂:天川友親、校訂:八木哲浩	臨川書店
播磨鑑	1958	著者:平野庸修、校訂:播磨史籍刊行会	播磨史籍刊行会
山島民譚集(収録:『定本柳田國男集』27)	1964	柳田國男	筑摩書房
千種村是	1920	編集:兵庫県宍粟郡千種村役場	兵庫県宍粟郡千種村役場
伝説の兵庫県	1961 (2000再刊)	西谷勝也	神戸新聞総合出版センター(再刊)
千種 西播奥地民俗資料緊急調査報告書	1972	編集:兵庫県教育委員会文化課	兵庫県教育委員会
兵庫の伝説 1	1981	編集:有井基、絵:のざきジョー	神文書院
播磨 山の地名を歩く	2001	編集:播磨地名研究会	ひめしん文化会、神戸新聞総合出版センター
日本の昔話と伝説	2004	大島建彦	三弥井書店
しそあの逸話	2006	編集:しそあ森林王国協会	しそあ森林王国協会

所在地リスト



千種町	宍粟市千種町
未広	佐用町未広
峰相山	姫路市石倉
明石	明石市中崎、ほか

ひょうご歴史ステーション「ひょうご伝説紀行」は、兵庫県立歴史博物館により管理・運営しております。サイトで使用するテキスト・画像などのコンテンツ全般の著作権は当館に帰属し、無断での複写・転用・転載などを禁止いたします。

ひょうご伝説紀行 妖怪・自然の世界
<http://www.hyogo-c.ed.jp/~rekihaku-bo/historystation/legend3/>

編集発行 兵庫県立歴史博物館
 〒670-0012 兵庫県姫路市本町6-8 079-288-9011

第1刷 2009年4月1日